

經濟論叢

第103卷 第4号

外部經濟と交通投資効果山 田 浩 之 1

資本供給源としての英領植民地本 山 美 彦 19

マルクスの資本主義像と歴史意識今 村 仁 司 39

書 評

経済学史学会編『『資本論』の
成立』の中の二つの論文平 井 俊 彦 56

昭和44年 4 月

京都大學經濟學會

《書 評》

経済学史学会編『『資本論』の成立』

の中の二つの論文

平 井 俊 彦

ま え が き

『資本論』第1巻刊行100年を記念して、1967年11月に『『資本論』の成立』が、経済学史学会によって出版された。内容は、1. 『資本論』の思想史的背景、2. 『資本論』形成の諸問題、3. 『資本論』第1巻の反響、以上3部から構成され、学史学会の18名の会員がそれぞれ健筆をふるっている。1967年には『資本論』刊行100年を、1968年には「マルクス生誕150年」を記念して、かなりこの種の記念刊行がおこなわれており、その概要は京大経済学部資料室編「マルクス『資本論』100年・マルクス生誕150年記念論文」(『経済論叢』第102巻第5号)ならびに『『資本論』第1部刊行100年にあたっての評価—ドイツ、ソヴェト、英米—』(『経済研究』第19巻第4号、pp. 342-357)によっても知ることができる。これら出版物のなかで本書の占める地位は、改めて評価されねばならないであろうが、その体系的や論文の密度はかなり高いものと推察できる。だが本書は、一おう編集者によって組織的に編まれたものであるが、個別論文を配列したものだから、全体としての評価はかなり困難である。昨年の「経済学史学会年報第6号」の書評欄で取り上げなかった理由も、この点にあった。むしろ、個々の論文について、個別的な論点をあげたほうが、この種の書物についてふさわしいと思うので、ここで次の2つの論文を主に取りあげてみよう。

1. 細見 英「マルクスとヘーゲル」
2. 山中隆次「ヘスとマルクス」

なお、この書評は、1968年1月27日に関西大学での経済学史学会関西西部会で、和歌山大学の宮本義男氏が1850・60年代における『資本論』形成に関する3つの論文(平田清明・佐藤金三郎・杉原四郎3氏の所論)についておこなった批評とならんで、わたしの担当したものであるが、本稿の執筆にあたっては、その時に執筆者と交わした討論や会員相互の合評をも参考にして、新しい論点をもふくんでいる。なお、その時には、上記2

論文に続いて 3. 重田晃一氏の力作「労働疎外論と唯物史観」をも取り上げたのだが、ここでは残念ながら割愛せざるをえない。というのは、この論文は『経済学・哲学手稿』から『ドイツ・イデオロギー』への思想形成の転換点を真正面から問題にしたきわめて重要な論文であるが、これを十分に批判するためには、新版『ドイツ・イデオロギー』およびこれに基づいた新しい研究文献を吟味したうえでおこなわれるべきであると考えからである。ただ、ここでこの論文について指摘しておかねばならないのは、『ドイツ・イデオロギー』のなかで、一面では『経済学・哲学手稿』の労働疎外論がうけつがれながら、他面では人間の歴史的・社会的構造がつかまれ、客観的な歴史法則に即して社会形成の論理が構想されてくる。だから、歴史認識と論理構造との二面から問題を立てねば、この転換はとらええない、ということである。この点については、いずれ機会をみて論じることとしたいことを、同氏におことわりしておかねばなるまい。なお、他の諸氏の論文についても、紙数がごく限られているので、論文の意図を十分に再現できない。ここでは、批判の指標を簡単に示すにとどめておく。

I 細見 英「マルクスとヘーゲル—経済学批判と弁証法—」

ヘーゲルとマルクスとの連関の問題が問われ始めたのは、新カント主義が後退するとともに、新ヘーゲル主義が形成され始めた今世紀の初頭である。Zitta によれば、その発端を David Koigen, *Ideen zur Philosophie*, 1910. と Johann Plenge, *Hegel und Marx*, 1911. にみているが、マルクス主義内部でマルクス像をめぐる論争としてこの問題が脚光をあびてくるのは、1923年に出版された二冊の著書、Georg Lukács, *Geschichte und Klassenbewusstsein* と Karl Korsch, *Marxismus und Philosophie* であろう。それ以後、ヘーゲルとマルクスとの連関をどうつかむかは、歴史の危機の段階ごとに問われてきたし、またマルクス主義のなかで自らの思想的立場を明確化する試金石となった。たとえば、最近では Louis Althusser と Herbert Marcuse がそれぞれ異った視点からヘーゲル再評価の問題を提起しているが、これについては改めて論点を整理する必要があるだろう (Iring Fetscher, *Karl Marx und der Marxismus*, 1967)。「ヘーゲル＝マルクス」問題は、それ自身一つの現代思想史を形づくり、マルクス主義の発展史のなかで大きな地位を占めている。細見論文はこうした問題史をふまえながら、梯経済哲学を出発点としつつ、自らの唯物弁証法の理論的体系を立てようと試みた野心的な労作である。

初期マルクスに力点をおけば、実存主義や疎外論に傾くし、後期マルクスに重点を移せば、経済理論と哲学との断絶が生まれる。細見論文は前者の修正主義と後者の教条主義という二つの潮流に対決して、第3の立場つまり「ヘーゲル＝マルクスの対立を媒介

を媒介とした連続性」を主張する。この立場は、同氏が「梯経済哲学批判序説」なるサブ・タイトルで『『資本論』の論理構造』(上)(中) (『思想』No. 519, No. 526) のなかで、展開した問題意識や論旨と主なるものであろう。わたしも大きいわく組では、この立場に同感をよせるものである。というのも、こうしてはじめてヘーゲル＝マルクスの非連続性と連続性を統一的に捉えうるとともに、さらに初期から後期へのマルクス思想の展開をも論理的に解明しようと考えからである。とはいっても、この連関を解くことはきわめて困難な問題であり、それへの接近方法も多様である。細見論文は一方で梯明秀教授のマルクス理解(資本論の弁証法的論理構造の解明)によるとともに、他方でヘーゲルとマルクスとの市民社会論批判の異質性を論理的に解明しようとするところに、その特色がうかがえるであろう。

ところで、この論文の基底をなしているのは、国家と市民社会との関係をつつむ現実総体に対するヘーゲルとマルクスとの「実践的關係態度」なのであるが、この立場は明らかに実在のうちにイデーを直観する梯教授の「実践的直観」の立場にほかならない(154ページ)。問題は、まず第一にこのカテゴリーなのであって、この立場では理論と実践とが予定調和的に相互に深化しあうものとしてつかまれており、実践概念が理論のなかに解消されてしまっている。だが、実践の構造はそれ自身きわめて重層的である。歴史を貫徹する生産＝労働(いうまでもなくこの労働そのものと、労働一般と歴史的に規定された労働の在り方とをふくむ)と、生産関係を変革する革命的実践との二重の構造でとらえねば、ヘーゲル＝マルクスの論理的継承関係は明らかとならない。本論文では、普遍的な労働概念と革命的人間解放とが直接的に結びついている。だから、逆に第二にいえることは、本論文はヘーゲルを初期のきわめて生き生きとした実践者(たしかに一面でこの点を押えておくことは重要なのであるが)として描かれたうえで、ヘーゲルの挫折を当時の歴史的現実という外から説明することとなる。この点でも、ヘーゲルの実践概念を論理的にとらえ直してみなければ、マルクスのばあいとおなじく初期と後期とのヘーゲルの連続性と非連続性を解明できないのではないか。『法哲学』と初期の『ドイツ国制論』との論理的関係が、ここでどのようにみられているのだろうか。第三に、マルクスの思想的発展についていえば、『経済学・哲学手稿』と『資本論』とが、余りにも直接的に結びついてはいしまいか。たしかに、一面では『経済学・哲学手稿』で『資本論』を生み出す要素は結実するのだが、市民社会把握という以上、『ドイツ・イデオロギー』を入れてこなければ、マルクス思想形成の屈折点が明らかとならない。この点は、単に注記(141ページの注36)する以上の重みをもつものであるし、また同氏の基底にある梯経済哲学をどう突破するかを試金石となる要因であろう。

Ⅱ 山中隆次「ヘスとマルクス—ドイツ古典哲学と フランス社会主義の結合を中心として—」

戦前とはもとより戦後しばらくの間は、マルクス思想の形成史研究は、主にレーニンのいわゆる「マルクス主義の三源泉」を軸にすすめられたために、ドイツ初期社会主義ことにヴァイトリングやヘスとマルクスとの関連の問題が、不当にも看過されてきた。もちろん、古典的にはストルーヴェやメーリングの『ドイツ社会民主主義史』のなかで、ドイツ初期社会主義をフランス社会主義と並べてそれなりの評価をあたえる動きはあったけれども、とくにわが国の内外でドイツ初期社会主義の再検討がおこなわれてきたのは、この十数年間のことである。外国でヴァイトリングやヘスの原典が再版され、それにともなって研究文献も出版されるにおよんで、わが国でも学史学会の会員を中心に、原典に基づく着実な研究がすすめられてきた。良知力、森田勉、畑孝一、高橋正立などの諸氏とともに、山中隆次氏はそのうちの一人である。ことに『経済学・哲学手稿』の序文で、マルクスが『『21 ボーゲン』誌に掲載のヘス論文』を評価したことが、また、コルニエの『マルクス・エンゲルス』研究が、ヘス再評価の機縁となったことは、いうまでもない。従来は、マルクスからみたヘスしか問題とされなかったのに反し、ヘスそのものを当時の思想的状況のなかでとらえなおしたうえで、改めてヘスからマルクスに照明をあてようとする方法が確立されてきた意味はきわめて大きい。広松渉氏の最近の力作『マルクス主義の成立過程』も、こうした一連のヘス研究のなかで育まれた、といえるであろう。たしかに、この研究分野は未知の領域の開拓だけに、その意義も大きい、その反面で大きい問題性をもはらんでいるでは、どのようにか。

問題は大きく二つある。まず第一に、山中論文の大きな意義は、マルクスやエンゲルスから「真正社会主義者」として切られたヘスではなく、どこまでもヘスの社会主義をそのゲネシスから掘りおこし、その特色を追求しようとする。この点では、先に発表した同氏の論文「ヘスとマルクス—経済的疎外を中心として—」(上)(下)、『経済理論』第62号と第63号)よりも、ヘスに内在的である。本論では、マルクスが評価した『行為の哲学』を中心に、一つにはフランス革命の思想的表現であるバブーフと、二つにはカントの批判的継承者たるフィヒテの無神論を、ヘスがいかに統一したかについて、迫力のある論証が続く。だが、二つの要素は同一の重みで結びついているのだろうか。イギリスやフランスの初期社会主義が、社会主義の構想に重点を移すのに対し、ドイツのそれは、ことにヘスのそれはフィヒテの「人間主体の創造的精神」に特質が求められるのではないだろうか。すくなくとも、ヘスの初期の著作『行為の哲学』のなかでは、主体は意識的個体である。そうだとすれば、フィヒテからフォイエルバハにつながるヘスの地位が、

より大きく浮かびあがるであろうし、ヘスのなかにある個体の自律性、またはアナーキズムの萌芽といった側面が、したがってヘス思想の現代的意味が再評価されるのではなかろうか。

そうだとすれば、第二にヘスとマルクスとの関係についても、『独仏年誌』でのマルクスはたしかに一面で貨幣や私有財産のもとでの人間性の否定や物象化を説くかぎり、両者の重なり合いはみられるし、したがってヘスがマルクスに与えた影響は考察されねばなるまい。だが、その反面でマルクスの基本的思想とヘスとの対立面をより大きく評価すべきではないか。山中論文も両者の差異を、一方はフィヒテ、他方はヘーゲルとみ、マルクスのプロレタリアート観がヘスに欠如していることを、指摘している。だが、『経済学・哲学手稿』では、山中氏の前掲論文や畑氏の一連のヘス研究の主張のほうが、両者の継絶面をさぐりあてている、とわたしはみたい。また、そのほうが「労働の疎外」に関するマルクスの個性をうきぼりにすることができるであろう。

(本稿を執筆しおえたあとで、良知力氏の「ヘスは若きマルクスの発展の座標軸たりうるか」(『思想』No. 539, 1969年5月)を見ることができた。この論点に深くかわっている、ので、参照されたい。)